



巻頭言

お コ メ と 水

(財)日本植物調節剤研究協会 専務理事 小澤 啓男

おコメは栄養価高く、バランスのとれた食べ物で、我々日本人にとっては、命の源である。おコメを炊いたものを「めし」と言い、「めしを食べよう」と言えば食事に誘うことだし、最も興味深いことを「三度のめしより好き」とも表現した。「めしの食い上げ」はもう生活の道を失うことで、「米塩の資」を絶たれたことを意味した。江戸時代は一日二食、一食は二合五勺が標準の食生活で、これを一人扶持として、今で云う給料代わりに支給されていたことは、TVの時代劇などで馴染みのところである。

この貴重な「おコメのなる植物」がどのように伝来したかについては、諸説がある。日本は御存じのように海に囲まれた島国、どこから上陸してもなんら不思議はない。最近のニュースで、岡山県内の遺跡からプラント・オパールを検出し、日本国内の稲作開始は4,500年前の縄文中期にまでさか上る、との説が発表された。コメ文化は将に、古いわが国の文化である。たった一粒が何千倍にもなるこの稲なる植物の生産性はアダム・スミスも認めたところであり、我が国の食生活を支えてきた。

稲は基本的に「水」が無いと育たない。日本列島は大半が傾斜をもった地形で、水を張り、それを保持するためには平らな水田を作らなければいけない。四季折々に目を楽しませてくれる自然も、時には頑固で意地悪で、降り続く梅雨や秋雨、風を伴って襲う台風、真夏の早魃など、至極折り合いのつきにくいところがある。川を堰き止め灌漑用の水路を築いて水を引き、その水を保つためにしっかりした畦を作るなどの大工事における先人の苦労は並大抵なものでは無かったはずだ。とくに、中山間地域の谷間に広がる棚田を一望すると、何とも言えない感

激を覚えて、むしろ美しい芸術でさえある。将に、歴史的な遺産である。

このように苦労して作った水田だからこそ、維持するためには精魂を傾けた。ひでりの時は「水掛け論」なる言葉が生まれたように、水争いも起こった。水に関わる水利権は極めて強い皆で助け合い守ってきたものである。

かつて、春先にはイネの栽培期を通して、灌水に支障がないように、農家総出で灌漑水路を整備した。農家は水田を平らに整地し、入水と共に畦塗りをし、水が漏れないようにしてから施肥、代掻き、田植えと作業を続けた。この畦塗りは、ところによっては「くろぬり」とも言い栽培期間中、大事な水が抜けないようにするためのものでかなりの力仕事であった。また農業用水路の整備は「溝さらい」と称して、地方では日にちが定期的に決まっており、川底掃除のための川干しを、子供達は待ち望んだものである。いまは、これもコンクリートの用水路、パイプラインなどに代わり、力とコツが必要な畦作りも専用機械ができたり、もっと簡単な畦畔だけで耕作される場合が多くなってきたが先輩達が苦労を重ねて延々と築いて、時には命をかけた農業用水を無駄にすることはならない。水を守ることは「土」を守ることに通じることを、農業に携わる人々がもう一度、思い起こして、イネにはなくてはならない水を細かに、大事に扱いたいものである。

「豊葦原の千五百秋瑞穂の国」なる呼称も空しい昨今ではある。また、いろいろと現場での対応の難しい点も十分過ぎるほどよく分かり、何の手助けもできない身は悲しいが、是非、農民の心意気と誇りを失わないで、本当のイネ作りをお願いしたい心境である。